

# 広島大学図書館蔵「いろは韻」2種の掲載漢字と和訓について

—聚分韻略・落葉集との比較を含めて—

白井 純・中尾 祥子

【キーワード】 韻書、韻目、いろは韻、和訓、いろは引き辞書

## 1. 本稿の要旨

本稿は、江戸時代前期の「いろは韻」系辞書である『増補以呂波雑韻』寛文4（1664）年刊と、『廣益以呂波雑韻刊誤』寛文10年（1670）年刊の「以」部全用例を比較し、掲載漢字と和訓の増補内容を明らかにした。

早い段階に刊行された「いろは韻」には出典とされる『聚分韻略』の影響が強いとされる。しかし、本稿で『聚分韻略』慶長17（1612）年刊本と比較したところ、『増補以呂波雑韻』・『廣益以呂波雑韻刊誤』はともに『聚分韻略』掲載漢字・和訓の範囲ではよく一致するものの増補部分が多く、特に遅れて成立した『廣益以呂波雑韻刊誤』では『増補以呂波雑韻』にみられた増補を更に進め、同訓異字を中心に増補する傾向が顕著であることが明らかになった。

「いろは韻」の主な使用目的は和語（和訓）を手がかりとして漢詩の創作に必要な韻目を知ることだが、語の意味を反映した和訓に基づき、字義が同一または類似して必要性を満たす韻目をもつ漢字を選び出すためには同訓異字が豊富であることが有利である。多い例では数十字に及ぶ同訓異字を掲載する『廣益以呂波雑韻刊誤』の増補内容は、そうした需要を満たすものだったと考えられる。

本稿では同じく和訓いろは引きのキリシタン版『落葉集』の一部「色葉字集」との比較も行った。『落葉集』の漢字の左右傍訓は定訓としてその漢字に最もよく結びつく和訓を示し、その他の字下注訓と明確に差別化されている。これらを「いろは韻」の和訓と比較すると、定訓はよく一致するものの字下注訓では一致の度合いが低くなる。相対的にみて定訓が当代の安定した和訓であることは明らかだが、字下注訓の由来については今後の検討が必要である。

## 2. 先行研究と本稿の立場

岡島・佐藤・米谷・鈴木（2015）および鈴木（2016）は「いろは韻」の「以」部冒頭の文字によって諸本系統を「雷本」<sup>いかづち</sup>「乾本」<sup>いぬい</sup>「瀧本」<sup>いやし</sup>に分類した（表1）<sup>1</sup>。

表1 「いろは韻」の諸本系統と特徴

系統	代表的な資料	特徴
雷本	伊呂波韻（古写本） 以路波韻（1590頃刊） 川越市立図書館蔵本（同上） 増補掌中以呂波韻大成（1842刊）	いろは・平仄分類 意義分類なし 排列規則不明
乾本	寛永11年版本（1634刊） 寛永16年版本（1639刊） 伊呂波韻略（1669刊） 廣益以呂波雜韻刊誤（1670刊）	いろは・平仄分類 意義分類あり 排列規則不明
潼本	増補伊路波三重韻（1656刊） 増補以呂波雜韻（1664刊）	いろは・平仄分類 意義分類あり 排列は聚分韻略に一致

佐藤（1963）は諸本を紹介しつつ「潼本」の『増補以呂波雜韻』を取り上げ、『古本節用集』・『下学集』・『倭玉篇』と比較し、『古本節用集』との間では345和訓のうち221和訓が共通するとした。山田（1973）は「雷本」古写本と『和玉篇』『新韻集』との関連に言及し、木村（2002）は「乾本」の『寛永16年版本』の掲出漢字が『聚分韻略』に一致するとしている。米谷（1997）は『増補以呂波雜韻』（本稿で取り上げた本）が『新刊節用集大全』に与えた影響を指摘している。

鈴木（2016）はそれぞれの系統のなかで早い時期の刊本を選び、「雷本」から『川越市立図書館蔵本』、「乾本」から『寛永11年版本』、「潼本」から『増補伊路波三重韻』を取り上げ、「ヨ」「ノ」部の全用例を比較している。結果として、掲載漢字は殆ど『聚分韻略』の範囲に収まり、特に『伊路波三重韻』にその傾向が強いという。和訓についても3本すべて9割前後一致するといい、「いろは韻」の成立に『聚分韻略』が深く関わったことが明らかになっている。

本稿では以上を踏まえ、「乾本」として『廣益以呂波雜韻刊誤』寛文10年（1670）年刊（広島大学図書館蔵 大国1419）、「潼本」として『増補以呂波雜韻』寛文4（1664）年刊（広島大学図書館蔵 大国1129）<sup>2</sup>を選んだ。これらは鈴木（2016）の取り上げた「いろは韻」の刊行から遅れており、後発の辞書としての増補の様子が観察できる。そこでサンプル調査として、『廣益以呂波雜韻刊誤』の「以」部全体の1259和訓を対象とする調査を行った。

### 3. 内容の紹介と注記の検討

「いろは韻」の紹介は前節のように鈴木（2016）に詳しいので、ここでは概要を簡単に説明した後、本稿で取り上げた「いろは韻」の特徴を紹介する。

岡島・佐藤・米谷・鈴木（2014）の分類によれば、『増補以呂波雜韻』（図1）は「以」部冒頭が潼から開始する「潼本」、『廣益以呂波雜韻刊誤』（図2）は「乾」から開始する「乾本」である。どちらもいろは引きの韻書であり、漢詩を作るために和訓（和語）から字音を知り、必要な



図1 増補以呂波雜韻

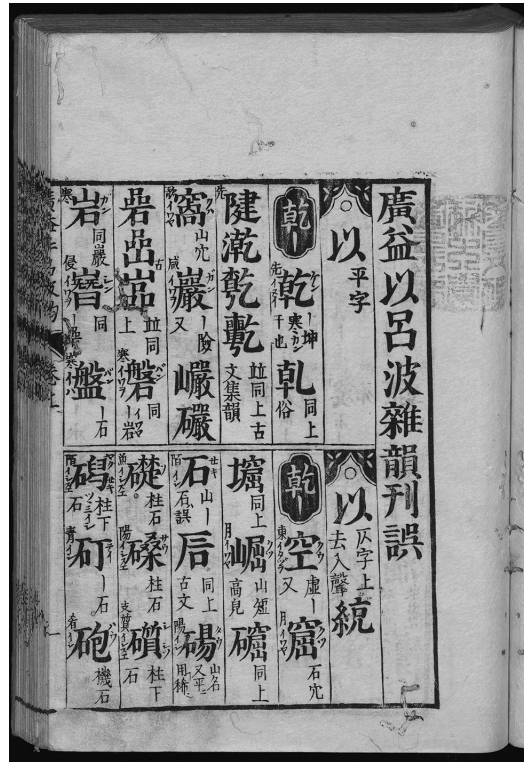


図2 廣益以呂波雜韻刊誤

韻目に合致する漢字を探り当てるための辞書という基本的性格は同じである。

掲載漢字は和訓によるいろは分類で、内部で更に意義分類を行う。1つの漢字に対して複数の和訓がある場合は、それぞれの部に配属するので、全体としては同じ漢字が何度も掲載される。

どちらも上部に平、下部に仄を配置するが、『増補以呂波雜韻』は上部3段下部4段のマス目に漢字を配置するのに対し、『廣益以呂波雜韻刊誤』はおおむね上部3字下部3字であり、異体字掲出が多いためマス目を設けず1行あたり3～4字となる。どちらも仄字が多いため「以」部末尾付近では上段にも仄字を配置して余白を少なくするが、1行アケ、および上下段を分ける罫線を二重線から一重線に変えることによって平字との区別がなされている。

掲載漢字の右側に音読み、左上に韻目を表示する点も共通するが、『以呂波雜韻』の和訓が漢字の字下にあるのに対し、『廣益以呂波雜韻刊誤』では和訓が左側にあるため、韻目がその上やや窮屈な配置となる。仮名遣いには混乱が多く濁音表記の有無も統一されない。また、肝心の韻目にも不正確な点がある。どちらも義注は字下にある。

『増補以呂波雜韻』の掲載情報は1つのマス目で完結する形式であるため、同一和訓であって

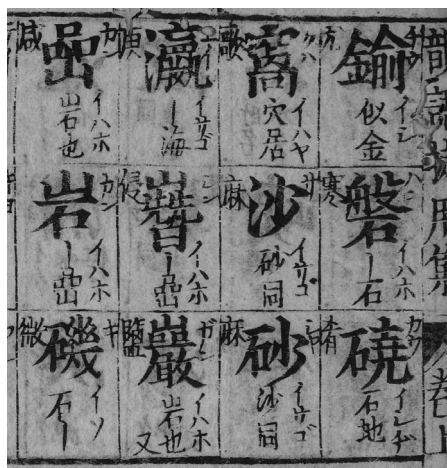


図3 増補以呂波雜韻（平声）の「イハホ」



図4 廣益以呂波雜韻刊誤（平声）の「イワヲ」

も一々注記することが多い（図3）のに対し、『廣益以呂波雜韻刊誤』は「同」注記により同一和訓の再掲出をしないことが多い（図4）。和訓「いはほ」<sup>3</sup>を例に挙げると、『増補以呂波雜韻』（1ウ上段）では「磬」が1行目、「巒巖岳岩」が3～4行目にあって別訓の漢字がその間にあるが、すべて「イハホ」が字下に示されているので関係は単純である。『廣益以呂波雜韻刊誤』（1オ上段）では和訓「イワヲ」に関連して「巖巖巖巖岳巒巒磬岩巒」を掲載する。まず、先頭の「巖」に続く「巖巖巖巒巒」には「竝同上」の注があって和訓や韻目の表示は無いが、これらは異体字注として直上の「巖巖巖巒巒」が異体関係にあり、従って同一の和訓や韻目を持つと解釈できる。これらの異体字は「古文・俗・籀文・本字・説文」のような注記を伴うことがある。「磬」には「イワヲ」「寒」の注記があり、「同」注記もある。この「同」注記は直上の「巖」を参照する（異体字部分は飛び越える）注記で、別字（別韻）だが同一の義注「巖險」を持つことを表す。「岩」は和訓がなく「寒」「同巖」の注記を持つが、「磬」ではなく「巖」を参照する注記なので、想定される和訓は「イワヲ」と考えられる。「巒」は「侵」「同」注記を持ち「岩」を参照するが、「岩」は「巖」を参照するので、結果的に「巒」も「巖」を参照し和訓「イワヲ」を持つ。

両者を比較すると、掲載漢字は『増補以呂波雜韻』が「磬巒巖岳岩」で、『廣益以呂波雜韻刊誤』が「巖巖巖巒巒巒巒巒巒巒」であり、増補は「巖巖巖巒巒」の異体字部分であることが分かる。次節では、このような増補の内容について詳しく検討する。





表3 『増補以呂波雑韻』(縦軸) から『廣益以呂波雑韻刊誤』(横軸) への増補

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	22	27	28	29	30	37	39	48	平均増補漢字数	
0	21	1		1																										1.17
1	99	9	2			1																								0.16
2	2	28	11	3	3	1																								0.58
3		1	7	3	3	2																								0.86
4				5	3	2	2		1																					1.38
5				3	4		1		2																					0.7
6						2		1	1	1																				1.8
7							1	1	2	1					1															2.67
8								1	2				1																	1.75
9								1		1		2	1	1																2.5
10										1	1					1														2.67
11												1																		1
12																														
13																		1												5
14																														
15																														
16																1					1									3.5
17																														
18																														
19																					1									3
20																								1	1					9.5
21																							1							7
22																						1								5
34																										1	1			4
41																												1		7

で当該和訓が初めて現れた「鳩(いかるが)」「類禡(いくさまつり)」「制割制(いなぶる)」のような例である。これに該当する和訓は少なく、増補分(新規追加分)は1和訓あたり平均1.17字に過ぎず同訓異字も少ない。辞書の使用目的からすれば、珍しい和訓で漢字表記の結びつきが弱いものを掲載する理由に乏しいということだろう。

表の2段目は『増補以呂波雑韻』に当該和訓を持つ漢字が1例のみの例で、111例のうち99例は『廣益以呂波雑韻刊誤』で増補されない(表中の反転表示部分は増補がなかった漢字を意味する)。9例は2字の同訓異字、2例が3字の同訓異字、1例が6字の同訓異字を掲載する(「魅(いへのかみ)」が「魅彖彪魑魍魎」に増補されたのが最大)。増補分は1和訓あたり平均0.16字(1和訓あたり1.16字の掲載)に過ぎず同訓異字の増補にはやはり消極的である。

表の3段目以下は『増補以呂波雑韻』で同訓異字がみられた例で、3段目では『増補以呂波雑韻』で和訓に対して2字の同訓異字を掲載したのが49例あり、そのうち2例は掲載が1字に減り

（1字は異体字注記が新たに付いたので集計から外した）、28例が増補なし、11例が1字増補、4例が2字増補、3例が3字増補、1例が4字増補であることを意味する。2段目に比べて増補がやや多いことが確認できる。

以下、『増補以呂波雑韻』での同訓異字が多いものになるが、全体的傾向として増補は表の上部で少なく下部で多い。このことは『増補以呂波雑韻』での同訓異字の掲載が多い和訓ほど『廣益以呂波雑韻刊誤』での増補も多いことを意味している。もともと同訓異字を多く持つのは常用性の高い和訓であることが多く増補しやすかったとみられるが、これにより同訓異字のなかから必要な韻目を持つ漢字を探すという辞書の特徴がより強化されている。

#### 4.2 「いろは韻」掲載和訓の比較

『増補以呂波雑韻』と『廣益以呂波雑韻刊誤』に共通して掲載される漢字について、『増補以呂波雑韻』「以」部の和訓が『廣益以呂波雑韻刊誤』「以」部に全く掲載されないのは延べ13字で、共通する749字の1.7%である（表4）。

表4 『増補以呂波雑韻』掲載漢字の和訓が『廣益以呂波雑韻刊誤』に全く一致しない例

字	増補以呂波	廣益以呂波	字	増補以呂波	廣益以呂波
井	イ	イノモト	瀧	イケタマリ	イケ
息	イカウ・イコフ	イキ	岨	イシヤマ	イケヤマ
艶	イカル	イカリカホ	急	イソガハシ	イソカシ・イソグ
涸	イキ	イキライ	緒	イトクル・イトスジ	イトグチ
漚	イキカヘル	イツル	獨	イヌ	イヌクサシ
掬	イキドシ	イタル	毘	イノコ	イヌ

掲載漢字の一致とあわせ、同じ「いろは韻」辞書として影響関係は明らかだが、なぜこれらの和訓が一致しなかったのか詳細は不明である<sup>4</sup>。

共通して掲載する漢字について、『増補以呂波雑韻』に掲載が無く『廣益以呂波雑韻刊誤』に掲載がある和訓は多く、1字1訓だったものが1字多訓になり検字しやすくなっている。その一方、『増補以呂波雑韻』で多訓字だったものは、『廣益以呂波雑韻刊誤』で和訓の一部を失うことがある。

『増補以呂波雑韻』と『廣益以呂波雑韻刊誤』で掲載漢字と和訓1つを共有するもののうち、『廣益以呂波雑韻刊誤』で和訓を増補したのが30例ある（表5）。

表5 漢字と和訓1つ以上を共有するうち『廣益以呂波雜韻刊誤』で和訓を増補した例

字	増補以呂波	廣益以呂波
籍	イイハハキ	イイバハキ・イカキ
苛	イカル	イカル・イラ・イライラ
嗜	イカル	イカル・イルイキ
歎	イカルキ	イカルキ・イカル
湫	イケ	イケ・イキドヲリ
矧	イシ	イシ・イカリ
悃	イツカハシ	イツガハシ・イカル
勦	イタツカハシ	イタヅガハシ・イタハル
功	イタツラ	イタツラ・イサム・イサヲシ
勞	イタツラ	イタヅラ・イタハル
閑	イタヅラ	イタツラ・イトマ
楚	イタム	イタム・イバラ
假	イタル	イタル・イツキ
詎	イタル	イタル・イツクンゾ
粒	イチツブ	イチツブ・イナヅミ
賁	イツクシ	イツクシ・イサム
唼	イツクシ	イツクシ・イツハル
纒	イトクル	イトクル・イロドル
縷	イトスヂ	イトスヂ・イト
鄙	イナカ	イナカ・イヤシ
辞	イナム・イナフル	イナム・イナブル※・イトマゴヒ※
往	イニシヘ	イニシヘ・インジ
戍	イヌ	イヌ・イヘ?
寿	イノチナカシ	イノチナガシ・イノチ※
延	イノチナカシ	イノチナガシ・イフル
言	イハク・イフ	イワク・イフ※・イフココロ※
瓶	イユ	イユ・イロ
居	イル	イル・イエ
容	イルル	イルル・カタチ※
廬	イエ・イヲリ	イエ・イヲリ※・イホ※



これらは単純な和訓の増補で、※印は同一箇所での複数訓掲載を示す。疑問訓の「戌（イへ）」が誤植とすれば29例であり、語頭「い」の和訓をもつ漢字に限るが、多訓字を増やすことにはあまり積極的ではない。同様の条件で逆に多訓字が減少したのが43例あり、むしろ1つの漢字に対する和訓を絞り込んでいる（表6）。

表6 漢字と和訓1つを共有するうち『廣益以呂波雜韻刊誤』で和訓が減少した例

字	増補以呂波	廣益以呂波
呵	イカル・イサウ	イカル
叱	イカル・イサムル・イサフ	イカル
憤	イカル・イキトラル	イカル
呵	イカル・イサウ	イカル
慍	イカル・イキトヲリ	イカル
吒	イカル・イサナム	イカル
嘘	イキヅク・イキス	イキツク
威	イキトヲリ・イカル・イキヲイ	イキトヲリ
競	イキトヲリ・イサム・イマシム	イキトヲリ
悶	イキドヲリ・イキトシ	イキドヲリ
弋	イクルミ・イル	イグルミ
遣	イサキヨシ・イトマアキ	イサギヨシ
俚	イササカ・イヤシ	イササカ
詭	イザナム・イドム	イサナウ
磔	イシノタマ・イシタタミ	イシノタマ
缸	イシバシ・イシトヒ	イシバシ
磴	イシバシ・イハホ	イシバシ
磬	イシユミ・イシノヤ	イシユミ
磬	イシユミ・イシノヤ	イシユミ
堰	イセキ・イゲタ	イセキ
忙	イソカシ・イトマアキ・アラス	イソガハシ
遑	イソカシ・イトマアキ	イソガハシ
煩	イタツカハシ・イキトヲリ・イタハシ	イタヅガハシ
煩	イタツカハシ・イキトヲリ・イタハシ	イタヅガハシ
惆	イタハル・イタム	イタハル
劇	イタム・イソカハシ	イタム
悵	イタム・イタハル	イタム
輸	イタル・イタス	イタル
何	イツクンソ・イカン・イツレソ	イツクンゾ
奈	イツクンソ・イカン	イツクンゾ

満	イツミ・イソ	イツミ
挑	イトム・イサナム	イドム
條	イノヲヒ・イトトハ	イトヲビ
穰	イナグキ・イナクサ	イナグキ
盤	イハ・イシ	イハ
禁	イマシム・イサムル・イム	イマシム
諷	イマシム・イタマシム	イマシム
諱	イミナ・イム	イミナ
苟	イヤシクモ・イヤシ	イヤシクモ
森	イヨヤカ・イヨシシ	イヨヤカ
坐	イル・イナカラ	イル
射	イル・イトウ	イル
称	イハク・イフ	イワク

『増補以呂波雑韻』が必要に応じて一つの漢字に複数の和訓を列挙する（「以」部なら語頭「い」の和訓に限る）のに対して『廣益以呂波雑韻刊誤』は原則として左傍に1つの和訓しか無いため絞り込まれたのだろう。但し、それがどのような基準に基づくのかは明らかでない。

この他に増減のあったものとして、

祝（イノル・イハウ）→祝（イノル・イヲウ）

恂（イトマ・アハツル）→恂（イトマ・イトマアラズ）

の2例がある。「祝（イヲウ）」は疑問訓かもしれない。

## 5. 他の辞書との比較

### 5.1 韻書と和訓の辞書

ここで、「いろは韻」の典拠となった『聚分韻略』（慶長17（1612）年刊）<sup>5</sup>と、キリシタン版『落葉集』のいろは引き「色葉字集」（慶長3（1598）年刊）を「いろは韻」と比較する。『聚分韻略』は部首引きであって検字方法が全く異なるが、掲載漢字の一致から「いろは韻」の典拠として知られている。「色葉字集」は和訓いろは引きであり、韻書ではないがそれぞれの漢字に対する有力な和訓（定訓）から検字できる設計であり、中世末期の日本語の実態を反映するとみられている。

### 5.2 『聚分韻略』

『聚分韻略』で語頭「い」の和訓をもつ漢字は延べ261字で、『増補以呂波雑韻』延べ762字、『廣益以呂波雑韻刊誤』延べ1259字に比べて格段に少ない。『聚分韻略』は『廣益以呂波雑韻刊

誤』に対して21%に過ぎないのだから、単なる増補ではなく、韻別の韻書から和訓引きの韻書へと基本的性格が変わったと考えた方がよい（表7）。

表7 和訓「いたる」をもつ漢字の増補

	格及至之衍臻迺 琿	尉謁詣作造底徹伝投到届甫 迄假格暨訃訖炬假侶抵氏莪 詎憤	遂達傳馭坐 弱躡遷届暨	輪	抵
聚分韻略	○	×	×	他	○
増補以呂波	○	○	×	○	×
廣益以呂波	○	○	○	○	○

表で「他」としたのは「いたる」以外の和訓である。『聚分韻略』から『増補以呂波雜韻』へ、そして『廣益以呂波雜韻刊誤』へと語頭「い」の和訓に対応する掲載漢字が大きく増補されている<sup>6</sup>。これにより、韻目選択の幅も広がっている（表8）。

表8 対応する韻目の拡大

	東	冬	江	支	微	魚	虞	齊	佳	灰	真	文	元	寒	刪	先	蕭	肴	豪	歌	麻	陽	庚				
聚分韻略	1		2								1					2											
増補以呂波	1		5	1	2	2	3		1	1				1		3	1		2		2						
廣益以呂波	2	1	8	2	2	3	3		3	1				1		3	1		2		2						
青	蒸	尤	侵	覃	塩	咸	董	腫	講	紙	尾	語	麌	齊	蟹	賄	軫	吻	阮	旱	清	銑	篠	巧	皓	寄	馬
1																											
1																											
養	梗	迥	有	寢	感	琰	賺	送	宋	絳	寘	未	御	遇	霽	泰	卦	隊	震	問	願	翰	諫	霰	嘯	效	号
箇	禡	漾	敬	徑	宥	沁	勸	艶	陷	屋	沃	覺	質	物	月	曷	黠	屑	藥	陌	錫	職	緝	合	葉	洽	

しかし、『聚分韻略』261字のうち20字は『廣益以呂波雜韻刊誤』に掲載がない。字体が似ており和訓が一致する「磧（イサコ）」が「磧」、「質（イツワル）」が「質」だとすれば不一致は18例である（表9）。

表9 『聚分韻略』にあり『廣益以呂波雜韻刊誤』の「以」部にない漢字

字	所在	和訓	字	所在	和訓
起	14 ウ 3 上	イサル	纏	29 ウ 3 上	イロイト
遽	14 オ 7 下	イソク	闌	34 オ 9 上	イチノカト
赴	15 ウ 8 下	イタル	謹	37 オ 1 下	イカル
諛	16 ウ 2 上	イツハリ	堂	48 ウ 3 上	イエ
殊	18 ウ 4 上	イチシルシ	邪	48 オ 2	イツハル
稽	19 ウ 6 中	イタタク	呀	48 オ 3	イフカル
迨	24 オ 9 中	イタル	癩	61 オ 8 中	イヌ
愍	27 オ 5 下	イタム	歇	71 ウ 9	イコウ
慎	27 オ 7 下	イマシム	喝	72 オ 8	イナナク

和訓「いたる」「いつはる」「いたむ」などは『廣益以呂波雜韻刊誤』で同訓異字を多く掲載する有力な和訓であり、「愍（イタム）」は『増補以呂波雜韻』にも掲載があるので、『廣益以呂波雜韻刊誤』がこれを掲載しない理由を考えた方がよい。

『聚分韻略』の和訓が『廣益以呂波雜韻刊誤』に掲載されないのは延べ25例である（表10）。

表10 『聚分韻略』と『廣益以呂波雜韻刊誤』で和訓が一致しない例

字	聚分韻略	増補以呂波	廣益以呂波	備考
飯	イ	イイ	イイ	
叱	イサフ	イサフ・イカル・イサムル	イカル	※
憤	イキトヲリ	イキトヲル・イカル	イカル	※
俚	イヤシ	イヤシ・イササカ	イササカ	※
磬	イヤシ	イシユミ・イシノヤ	イシユミ	
磬	イヤシ	イシユミ・イシノヤ	イシユミ	
楚	イマシメ	イタム	イタム	
楚	イマシメ	イタム	イバラ	
輸	イタス	イタル	イタル	
粒	イナツフ	イチツブ	イチツブ	
粒	イナツフ	イチツブ	イナヅミ	
何	イツク	イカン・イツクンゾ・イツレ	イツクンゾ	
奈	イカン	イカン・イツクンゾ	イツクンゾ	※
潘	イツ	イツミ・イソ	イツミ	
系	イトスチ	イト	イト	
系	イトスチ	イト	イト	
電	イナツマ	イナヒカリ	イナヒカリ	
祝	イワキ	イハウ・イノル	イノル	※

嘶	イナナク	イハウ	イバウ	
響	イワ	イハホ	イワヲ	
僞	イウ	—	イワク	
謂	イフ	イウ・イハユル	イワユル	※
諷	イタム	イタマシム・イマシム	イマシム	※
苟	イヤシ	イヤシ・イヤシクモ	イヤシクモ	※
广	イエ	イヲリ	イヲリ	

25例のうち8例（備考欄※印）では『増補以呂波雑韻』と一致しており、表5に示したように『廣益以呂波雑韻刊誤』で当該和訓が無くなっている。『廣益以呂波雑韻刊誤』が『聚分韻略』を直接参照していない可能性を検討すべきである。

聚分韻略：和訓 A → 増補以呂波雑韻：和訓 A・B → 廣益以呂波雑韻刊誤：和訓 B

『廣益以呂波雑韻刊誤』で上記のような和訓の絞り込みがあったため不一致を生じたものである。

### 5.3 『落葉集』

『落葉集』のいろは引き「色葉字集」は和訓に対応する単漢字と熟字訓を併載する部分で、漢字の右側に定訓といわれる有力な和訓が現れる。この和訓はそれぞれの漢字に最もよく結びついた漢字を代表する和訓であり、漢字の字下に列挙される字下注訓とは明確に差別化されている。従って、この和訓は中世から近世にかけての有力和訓であり、「いろは韻」にも掲載があると期待される。

「色葉字集」で語頭「い」の定訓をもつ120字のうち113字が『廣益以呂波雑韻刊誤』に掲載があり、1字は誤植で不一致が実質6字なのはこのことを反映すると考えてよい（表11）。

表11 「色葉字集」で語頭「い」の定訓をもち『廣益以呂波雑韻刊誤』の「以」部にない漢字

字	所在	和訓	字下注訓	備考
寵	1オ5	いつくしむ	いつき・たつとぶ	
感	1オ7	いたむ	ほむる・いさめり	
慎	1オ7	いかる		「愼」の誤植
修	1オ8	いたはる	おさむ	
郭	1ウ1	いへ	ほがらか	
皎	1ウ2	いさぎよし		
鯛	1ウ4	いはし		



『廣益以呂波雜韻刊誤』の「以」部は延べ1259字の漢字を掲載しており、「色葉字集」と比較して文字通り桁違いであるから、一致する漢字が多いこと自体はむしろ当然である。

字下注訓に「い」から始まる和訓をもつ78字では『廣益以呂波雜韻刊誤』に掲載があるのは56字に留まり、育（いとけなし）、西（いる）などの22字は掲載がない（表12）。

表12 「色葉字集」で語頭「い」の字下注訓があり『廣益以呂波雜韻刊誤』の「以」部にない漢字

字	所在	定訓	字下注訓
育	2ウ1	はごくむ	いとけなし・やしなふ
西	3オ4	にし	いる・あき
感	3オ8	ほむる	いたむ
課	4ウ4	をほす	いたす・つとむ
修	5オ1	をさむ	いたはる・はじめ・をこなふ
多	5オ4	をほし	いくばく・うつ・まさし・
蓋	5オ6	をほふ	いただき・はかる
炊	6オ2	かしく	いひかしく
冠	6オ5	かむり	いただく・つかさ
賀	7オ8	よろこぶ	いはふ・よし
唯	7ウ3	ただ	いらへて
貴	7ウ8	たつとし	いみし・をもし・たかし
虚	8ウ2	そら	いつはる・うつけたり・むなし
染	8ウ3	そむる	いろ・けがす
陳	9オ3	つらなる	いくさ・かためなり・のぶ
弊	9オ6	ついゑ	いやし・やぶる
鍛	9ウ5	ねる	いる・きたふ
堂	9ウ6	ねやどの	いるる・たかし
莫	10オ1	なかれ	いちしるし・すくなし・まれなり・なし
誕	10ウ1	むまるる	いつはる・みだり
伊	14ウ8	これ	いづれ・ひとし・をとこ
最	21ウ1	もつとも	いとど・すつる

掲載されない漢字が相対的に多いのはこれらの和訓と漢字の結びつきが弱いためだと考えられるが、それを実証するためには双方の辞書での和訓の掲載方針を明らかにする必要があり、現時点ではその準備がない。

## 6. まとめ

本稿の結論は次のとおりである。

1. 語頭「い」の和訓をもつ漢字の掲載は、『聚分韻略』延べ261字、『増補以呂波雜韻』延べ762字、『廣益以呂波雜韻刊誤』延べ1259字である。
2. 直接の影響関係は不明だが、掲載漢字と和訓については『増補以呂波雜韻』が『聚分韻略』を、『廣益以呂波雜韻刊誤』が『増補以呂波雜韻』をおおむね取り込んだ状態であり、そのうえで掲載漢字の大幅な増補を行っている。
3. 増補の傾向として、多訓字（1漢字に対して多数の和訓）を増やすよりも同訓異字（1和訓に対して多数の漢字）を増やす方向での増補が顕著である。
4. 豊富な同訓異字は和訓から目当ての韻目を持つ漢字を探索するのに都合が良く、掲載漢字の増補はこのような使用目的をふまえたものである。

語の意味を反映した和訓に基づき、字義が同一または類似して必要性を満たす韻目をもつ漢字を選び出すためには同訓異字が豊富であることが有利である。多い例では数十字に及ぶ同訓異字を掲載する『廣益以呂波雜韻刊誤』の増補内容は、そうした需要を満たすものだったと考えられる。和訓で引くという性格上、利用者の漢字音に対する知識はあまり必要ない。掲載される漢字の難解さに比べ、結びつけられる和訓は常用性の高いものなので、当初から目的の漢字を念頭に置いた検字ではなく、常用性の高い和訓から同義字・類義字のリストを求め、そこから目的の韻目をもつ漢字を探り当てるための簡便な手引きとして、近世期にはこうした韻書の需要が大きかったのだろう。

鈴木（2016）によれば、「いろは韻」は初期の刊本はおおむね『聚分韻略』の掲載漢字・和訓の範囲内にあるというが、『増補以呂波雜韻』は掲載漢字が大幅に増加し、『廣益以呂波雜韻刊誤』は更にそれを進めて和訓で引く韻書としての個性を強めている。この転換点がどこにあったのか、そして大量の同訓異字をもたらした典拠は何なのか、「いろは韻」諸本および中世末期から近世初期にかけての古辞書の比較検討が必要である。

## 参考文献

- 岡島昭浩・佐藤貴裕・米谷隆史・鈴木功真（2015）「イロハ韻の展開（日本語学会2014年度秋季大会研究発表会発表要旨）」『日本語の研究』11-2、p.195
- 奥村三雄『聚分韻略の研究 付古本四種影印慶長版総索引』風間書房（1973）
- 木村晟『中世辞書の基礎的研究』汲古書院（2002）

- 佐藤茂 (1963) 「『いろは韻』考序説」『国語国文学』11号、pp.1-12
- 佐藤茂 (1977) 「『いろは韻』について (承前)」『国語国文学』20号、pp.56-71
- 鈴木功真 (2016) 「近世初期イロハ韻諸本の和訓試論 — 『聚分韻略』『新韻集』との対照を中心に —」『訓点語と訓点資料』137輯、pp.52-66
- 山田忠雄 (1973) 「伊呂波韻の古写本」(『長沢先生古稀記念図書学論集』三省堂、pp.425-478)
- 米谷隆史 (1997) 「新刊節用集大全の編纂資料をめぐって」『国語学』188集、pp.15-28

## 付記

本研究は2020年度広島大学大学院演習における中尾祥子のレポートを元とし、授業担当教員の白井純が本人の了承のうえで大幅な増補を行ったものです。

画像の引用にあたって、広島大学図書館が協力し、国文学研究資料館が公開している電子画像を利用しました。

本研究は JSPS 科研費18K00608の助成を受けたものです。

## 註

- <sup>1</sup> 鈴木 (2016) の情報に基づき再構成した。
- <sup>2</sup> この2本はいずれも京都府屋仁兵衛刊である。国文学研究資料館のサイトで画像公開されている。[http://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/owners/syuusyuu\\_list/list\\_hiroshimadaito.html](http://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/owners/syuusyuu_list/list_hiroshimadaito.html)
- <sup>3</sup> 「いろは韻」和訓の平仮名表記は、仮名遣いの違いや濁音表記の有無を統合した代表形である。
- <sup>4</sup> 「艸」では「イカリカホ」を同訓異字が多い和訓「いかる」に結びつけているが、孤立する和訓を避け、同訓異字として整理することで検字に配慮したのかもしれない。同様の例に「獨」の「いぬくさし」→「いぬ」がある。
- <sup>5</sup> ここでは、奥村 (1973) の複製本に掲載のある慶長17 (1612) 年刊本 (京都大学附属図書館蔵) を取り上げた。
- <sup>6</sup> 『廣益以呂波雑韻刊誤』は『増補以呂波雑韻』に比べて異体字の掲載が格段に多く「以」部では209字に及んでいる。韻目は正字と同じなので必要な韻目をもつ漢字を探すという辞書の使用目的からすれば有効な増補ではないと思われる。こうした増補が行われた意図も検討すべきだろう。

## Chinese characters (*kanji*) and their Japanese pronunciations (*wakun*) in two types of Iroha rhymes in the Hiroshima University Library collection: Comparing the *Shūbun inryaku* and the *Rakuyōshū*

Jun SHIRAI, Sachiko NAKAO

**Key Words:** Rhyming dictionary, Rhyme entry, Iroha rhyming dictionary, Japanese pronunciations of Kanji, Dictionary in Iroha order

This study compares all instances of the usage of the *i* 以 groupings in the early Edo period *Iroha* Rhyme dictionaries *Zōho iroha zatsuin*<sup>1</sup> (Extended iroha rhyming dictionary, 1664) and the *Kōeki iroha zatsuin kango*<sup>2</sup> (Kōeki Iroha rhyming dictionary corrected reprint, 1670), and examines the additional contents' Chinese characters (*kanji*) and their Japanese pronunciations (*wakun*). Although the early publication of *iroha* rhymes is said to have been strongly influenced by the *Shūbun inryaku*<sup>3</sup> (Rime outline, classified and explained), in this study, the *Zōho iroha zatsuin* and the *Kōeki iroha zatsuin kango* are compared against the 1612 edition of the *Shūbun inryaku*. In particular, the later established *Kōeki iroha zatsuin kango* has further expanded on the additions made in the *Zōho iroha zatsuin*, and a clear tendency can be observed in which different characters with the same Japanese pronunciation were added.

*Iroha* rhymes are used to determine rhyme schemes needed to create Chinese poetry using Japanese words (*wakun*) as a guide. Based on *wakun* that reflects the meaning of a word, it is helpful to have a large number of *kanji* with the same *wakun* pronunciation to select *kanji* with the same or similar meanings and a suitable rhyme scheme. The additional content in the *Kōeki iroha zatsuin kango*, which in many cases contains tens of characters with the same *wakun*, is thought to have been designed to meet this need.

This study also makes a comparison with the “*Iroha jishū*<sup>4</sup>,” which is also based on *wakun iroha* and is contained in the *Rakuyōshū*<sup>5</sup>, the dictionary of the Jesuit Mission Press in Japan. The left and right marginal notes for each *kanji* in the *Rakuyōshū* indicate the Japanese pronunciation most commonly associated with that *kanji* as a *teikun*<sup>6</sup> (fixed pronunciation) and are clearly differentiated from other pronunciations mentioned under the character notes. While the *teikun* is consistent with the *wakun* in the *Iroha* Rhyme, the degree of consistency is lower with those pronunciations mentioned in the notes. Relatively speaking, it is clear that the *teikun* is the most stable *wakun* of its time, but the origin of the pronunciation in the character notes needs further investigation.

---

<sup>1</sup> 増補以呂波雜韻

<sup>2</sup> 廣益以呂波雜韻刊誤

<sup>3</sup> 聚分韻略

<sup>4</sup> 色葉字集

<sup>5</sup> 落葉集

<sup>6</sup> 定訓